日のちぢまり

日のちぢまり

島尾敏雄

新潮社版

日のちぢまり
定価 600円

1965年10月30日発行
1973年 7 月10日二刷
著　者　島尾敏雄（しまおとしお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒 162 東京都新宿区矢来町71
振替東京808　電話(03)260-1111
印刷所　多田印刷株式会社　製本所　新宿加藤製本
© 1965, Toshio Shimao. Printed in Japan
乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

目

次

日のちぢまり　7
子と共に　47
過越し　83
＊
捜妻記　119
集会のあとで　137

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

＊
頃日のつとめ　159
思屑録　179
市壁の町なかで　197
後記　220

裝幀

駒井哲郎

島尾敏雄創作集

『日のちぢまり』

日のちぢまり

二月にはいらないうちに妻を病院につれて行こうと思ったのは、不眠でなやんでいたいとこの妻がK病院神経科の注射ですっかりよくなったことをきいてからだ。その注射は、いずれ緊張した神経をときほぐす作用をもっていて、もしかしたらそれが効いてくれるかもしれない。まえにもいちど近くの実費診療所の小児科の医師のすすめで緊張をとく注射を何本かうってもらい、はじめよく効いたと思えたのに、あとは格別のこともないままにやめてしまった。しかし薬はいろいろあるだろうし、またどんなことで快方へのきっかけがつかめるか、わかったものではない。いとこの妻の不眠の原因がなにであったかをききもらしたから、結果として不眠の状態があっても、私の妻もおなじようになおるとはかぎるまい。しかし事実として執拗な不

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

眠があり、神経がとがって私への疑惑がとれず、ことばで責めて一枚ずつ皮をむく問いただしを夜昼見さかいなしにやられてはとても堪えられないし、生活をつづけることができない。このところ、もとのふだんの生活にもどすために、あれこれつとめてみたがどれも効果があらわれない。とどのつまり考えの筋道がたたなくなり、先のことはどうでも、目先の苦痛がすこしでもとれるなら、なんでもやってみるつもりになった。

一月ものこりすくない二十七日の日、七時ごろ起きて病院に行く仕度にかかった。妻は力のぬけたたよりない様子でおとなしくしているので、かえってはりあいがない。それがはじまるとたえられない発作のときのその訊問を、こころのどこかでは待ちのぞむふうだ。妻はべつにどこも病気などではないのだという考えが、あいだをおいておこってくる。もし病院に行けば、医師は不興な顔付で、つれてきた私をなじるかもしれない。なんだかわざわざ遠い道を出かけて行くことがこころすすまず、なにとなくためらいがとれないが、ほかにどうしようあてもなく、からだを動かしていないと、妻の問いつめのことばで、がんじがらめになってしまう。

K病院は中央線沿いにあったから、当然のようにその方向の電車にのってしまったが、水道橋をすぎたあたりから妻の様子がおかしくなった。外に出れば中年のとしごろの女を目でしつこく追い、その暗い目付が物質のようなかたくなさで私をにらむのはいつものことだから、そこまでのことは観念していた。私が妻のその視線に刺しつらぬかれるのをさけるわけには行か

ないが、坐っていた座席から突然立ちあがり、よろけながら運転台の方に歩きだしたとき、それは私のそれまでの理解をはみでていた。思わず頭がくらくなった。私につっかかることを支えとしていた妻の行動の行くえが、私に背をむけてどこか手のとどかぬかなたに逃げて行く。すぐ私は妻を追い、子どもらは仕方なく私のうしろについてきた。暗いすみっこにあとずさって行くけだものの様子が妻にあらわれている。そこは最初の車輛だったから、まえに行けばレールの上に固定されながらも左右にゆれ、船の操舵室に似た酔いが与えられた。妻は真鍮の支柱につかまりふるえていた。私が近づくと目をくぼませておびえ、荒い呼吸をくりかえしている。

「どうしたのさ、いったい」

と口を出た私のことばは反響のなかでずるいひびきだけがのこってしまう。

「こわい、こわい。あなたはおそろしいひと。ほっといてちょうだい。あたしのそばにやってこないで」

妻はのろい口調で、じょうだんのように言う。世間から剝がれて行くようなたよりない声が耳をうち、私もふるえがうつってそばに立っていた。子どもらも、うかぬ顔を寒さで小さくし、様子のおかしな親たちのそばにくっついていた。

下車しなければならぬ駅で、ドアの外に出た。右うでで妻をかかえるようにし、左手でつながった子どもらの手をもち、のろい歩みで無言のまま跨線橋の階段をのぼり、改札口を出た。

駅前の、大通りの手まえにせまい広場があり、その両側は花屋や喫茶店、菓子屋、本屋などの店舗が低いのきをならべていたが、それはただ目にうつるだけで、私はそぎ立つ崖ぎわにつきだされて行く気持だ。そこでどんな生活が営まれていようと、崖のふちに吸いよせられて行く私たちにかかわりあってくれるものはない。たとえどこか異様な私たちの様子に興味をおぼえて近よってきたとしても、この状態から救いだしてくれはしない。私たち四人のほかにこの状態をわかちもつ者はいないし、そこから逃れでるには自分でやるほかに方法はない。家族が四人つれだって歩くことなどまえの私になかったので、習慣に不馴れなはじらいがのこっていたが、そうしないわけには行かない。漂流の小舟の中で四人がはなれることは考えられない。妻はふみだすどの一歩にも恐怖をおぼえて歩みがぎこちなく、うすい氷の上にいるようだ。またいきなり走りださないものでもないから、すこしつりあげるように妻をつかまえていた。病院の大きな建物は目のまえにそびえ、構内の広々としたたたずまいはとりすまして見えた。そこには多くの受付の関所と医師や看護婦の自信に満ちた拒否が待ちうけているみたいだ。

突然妻が泣きだしたとき、私は笑ったのかと思ったが、そうではなくて泣いているのだと知った。左腕を私にかかえられている妻は、遊ばせていた右手を使うでもなく、声をあげて泣いた。あたりをはばかるにも、右腕と左腕を妻と子どもらにあずけているので自由がきかず、そしてどの部屋の入口もとざされた私の頭脳はどんな考えも流れさせない。手ばなしの妻の泣声はみにくいいらだたしさをかきたてるのに、どことなく滑稽でおしなべて現実をおし流そうと

するみたいだ。もし往来の誰かがいぶかしい表情を示したなら、その目の期待に添うように私はわざとあやしいそぶりを加えたろう。それはひとをおどかすためではなく無害な異相をあらわしたいだけだ。私が期待したように妻は泣きつづけ、私も子どもも施しようのない顔付でその泣声をかぶった。

「こわいよう、こわいよう」

と妻は言い、ふと恐れの原因に腕をおさえられていると正気づくようでもあった。しかししっかとかかえこんだ私の腕をときほぐせず、妻はあきらめ力をぬいていた。強くおさえるともげてしまうたよりなさが伝わってくる。

のろい歩みで構内を横切るあいだだけでなく建物のなかにはいっても妻は泣きつづけた。いくつもの手続きの立ちふさがっている総合病院の受付が、なぞときのわからなさをまえにおしだして私たちをおびやかそうとする。すこしの油断のすきにも無視され置き去られてしまいそうな手続きにからみつかれ、私はよけい遠い気持になった。白いそろいの仕事着を裾短く着、白い靴下で下肢をおおった看護婦たちが、書類を胸にかかえあるいは担架の車をおして足早に通りすぎるすがたにかこまれ一応安心はできても、病院にはどこから誰がくるか見当がつかず、予測できない瞬時の危機が、どこにひそんでとびかかる折をうかがっているかわからない。気がつくと妻は泣きやんでいて、ベンチに腰をかけ遠い目つきをこしらえていた。子どもらは母親のそばで、きりのないひとの流れをじっと見ていた。私は受付から名前をよばれるの

を待ちながら、中年の女さえ通らなければいいと思い、また妻の視線のむかっている先に公衆電話室のあるのにおびえた。どちらもなぜか私に呼びだしをかけ、妻がききつけていきなり発作にはいりそうなおそれをひそめている。妻の敏感な探知、凶事の接近に対してはたらく感応の力をみとめないわけには行かない。つと感じとった気配をものがさずにそちらにからだを向け首をかしげて推しはかる恰好が目の底に焼付き、それは赤ん坊がそうするときのすがたに似ていて、私の心にしみ入ってくる。それは私のさえぎることのできぬ恐怖と背中あわせだ。偶然に妻が電話室の方を向いていることが、私のおそれをひきだしてあおりたてる。電話を利用するためその箱部屋に出入りするひとたちのかげりの多い顔つきはどれもみにくくよごれ、きっかけさえできればすぐ居直りそうだが、どこに居場所を変えたとしても、おびえからのがれることはできない。

最初の受付がすんでもその次の受付がひかえ、すぐには受診の現場にたどりつくことはできない。二階にある二度目の受付の看護婦が書類を受理したあとも、その書類がどう処理されるかに不安をもちだし、それはかぎりなくふとって行く。彼女がほかの考えにとらわれ無意識のかくしぶくろに落ちて、うっかりどこか別の引出しに入れたとすれば、診察がはじまり進行しそして終って担当の医師が引きあげてしまっても、呼出しはかからないだろう。いつまでも受付まえの長椅子にうずくまっている家族を見て、看護婦が不審に思いわけをきくだろう。そして彼女がその手落ちをたとえみとめても、その日の受診はもう断念しなければならない。その

時のうつりゆきを考えるだけで、どうしていいかわからない。そのうえ、家までの遠い道中をどんなにして帰ろうか。妻の発作は時と所をえらばなくなったから、発作が起きてしまえばおさまるまでは手のほどこしようがない。発作の起伏の流れのなかにじっとひそんでいるほかはなく、その途中で、どちらかの張りつめた琴線が切れてしまうことがおこってあとに引きつづく事態を考えると、こころが空っぽの場所に落ちて行く。自分では処理のできぬなげだしたい気持がわきたち、いらだった意地悪な考えばかりが湧く。もし誰かにからだをさわられたら、いきなりかん高い叫び声をたてたろう。

顔を伏せかげんにした妻がかげの濃い目で私をにらみ、しきりにひとりごとを言いだした。なんだか様子のちがいがひどくなって行く。家の中ではどんなに手がつけられなくても、誰かが訪ねてくれば手のひらをかえすように発作を解いた。家の外で、ときにかなり大胆に荒れてみせてもなんとなく意識にたちもどってくるところがあって、彼女の目の奥に私の出方をうかがっている余裕が感じられた。松の内に武蔵境の妻のおばのところに行く途中、電車のなかで泣きだしたときでさえ、妻のふるまいのなかには教訓的な気配がかくされていた。私もこころのどこかで了解し、片方にぶれた振子はまた反対側にゆれかえしてくることが予想できた。それがどことなくちがったものになった。私のがわでは了解も予想もかげをけし不安のなかで妻を見守っていると、そのゆるやかな変身がこころの奥だけでなく皮膚の上にもあらわれてきて、凝視するたびに細胞がはじけ、内にかくされていた異相が表面にでてきそうだ。妻は私と気持

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.